

生長の家の教えと実践 (3)

教えの独自性:「實相」という世界観

生長の家は書き記された思想伝統を重んじる。それは、同教団の教えが既成宗教や近代思想の体系化によるところが大きいということから理解できる。これは対面接触的な救済儀礼を重視する天理教やPL教団とは異なる特徴だといえよう。真理の源泉は書き記されたテキストにあり、真理を解釈し体得することが救済に繋がると考えられている。その意味で生長の家は「体験的な宗教」というよりも「知覚的な宗教」である。

『生命の實相』に書き記された理論的言語は、抜粋書、解説書、雑誌等にたくさん編纂されている。それは信仰生活においてテキストの学習が重要であることを物語っている。一方、後述する神想観、先祖供養、浄心行のような儀礼的实践も行われる。それらは現世における運命の好転につながるという。これらは「体験的な宗教」の特徴を示唆するが、同教団は天理教の「ひのきしん」やPL教団の「献身(みささげ)」というように、対社会的かつ愛他的実践活動には積極的でない。生長の家の宗教実践は、「祈り」に収斂するのである。

さて、生長の家では、世界は理念的に實相界と現象界とに大別される。實相界は真の実在性を持つ世界であり、無限の善、智恵、光、生命、愛、円満完全、すなわち神そのものである。現象界は実在しない仮の存在であり、仮相とも呼ばれる。人間の本来の姿は神の子であり、實相界に属している。しかし、人間の想念(迷い)は現象界という仮の姿にとらわれ、「物を有りとする念」がさらなる現象界を作り出す。人間にはそうした想念を取り払い、現象界が非実在であることを知り、「實相に観入する」ことが要請される。

いわゆる罪とは、實相の光明を包み隠すことだという。その結果、實相に気付かず現象を実在と取り違え、苦難を実在として思いこんでしまうところに不幸が生まれる。また、個我が実在すると思ひこむことも罪だとされる。本来個我のない無我の境地である實相を感得し、自他合一の世界に入ったとき、不安、嫌悪、争いがなくなり、救済された姿となる。

生長の家では、このような世界観を「知覚」するなかで「体験」が行われている。それが神想観、先祖供養、浄心行という儀礼である。これらを通じて、実践者は「實相に観入する」ことが求められる。それは、常に潜在意識に働きかけることであり、その際には「實相より発し實相を讃える言葉を唱えることが肝心である」という(谷口1997:253)。

(1) 神想観

神想観は、谷口が鎮魂帰神やニューソートの瞑想などから考案した彼独自の瞑想法である。それは、先述のように仮相としての現象界にとらわれている想念を取り払い、実在としての實相界を観入するために行われる。日本国内では、正座して両手を顔の前で軽く合わせ丹田呼吸法によって瞑想に入る。ブラジルなどの椅子文化圏では椅子に軽く腰掛けて行われる。最初「招神歌(かみよびうた)」を歌い、次に「イユー(生湧)」という気合をかける。そして「神想観の念ずる言葉」を心の中で念じ

る。普通1回30分から40分行われ、終わりに「世界平和の祈り」と「光明思念の歌」を歌い、二拍手する。ブラジルでは儀礼を全てポルトガル語で行ってもいいようになっている。筆者が調査を行ったレシーフェ教化部の信者の大半は非日系人だが、日本語で唱える者もいればポルトガル語で唱える者もいる。

また、「祈り合いの神想観」というのがある。これは、苦悩する人の正面に座り、互いに實相を祈り合うというものである。神の御心は無我の愛であるから、自分のことは少しも思わず、ひたすら相手の幸福のために祈るのだという。「祈り合い」が終わると、参加者の体験や「祈り合い」の時に感じたことがらを語る機会が設けられる。これは愛他的実践活動の一つといえよう。

(2) 先祖供養

教えの実践には「一切のものと和解」することが必要であるとされ、そのためには先ず死者との和解が求められる。死者と彼らの信仰と和解し、彼らの霊に光を与えることが自分自身をも救うとされる。祈りが捧げられる死者とは、祖霊と流産児の霊である。一家の不幸は、子孫に救済を求める祖霊によって引き起こされることがあるという。そのような霊にたいして、仮相にとらわれずに實相が観入できるようにと祈りを捧げるのが「先祖供養」である。

先祖供養では、ブラジルでも日本と同じように集会場正面に掲げられた「實相」の額の前に洗米と果物が三宝に載せられて供えられる。信者らは紙の位牌に先祖の名前を書き込み、三宝近くに供える。参拝者らは聖經を唱え、先導者が位牌に書かれた名前を読み上げるのが先祖供養のやり方である。

(3) 浄心行

浄心行とは、心の中にある怨みや憎しみ、恐怖や不安、自分自身を咎める心など、自己を開化させるうえで障壁になっている一切の気持ちを紙に書き、聖經読誦のうちに焼却するという儀礼である。心の底の想念は乾電池に潜在する電気エネルギーに例えられ、悪想念は病気や不幸を惹き起こす力を持っているという。それゆえ、そのようなネガティブなエネルギーを病気以外の形で表せば病気になる必要がなくなるとされる。

具体的には、憎しみや不安といった悪想念を文章に具体的に書き出し、書いたもの一切を神によって清めてもらうようにと焼却する。先導者は、静かに聖經を読み、靈的な雰囲気を作り出すなかで信者らが筆を進める。記載にあたっては自分自身の悪想念を包み隠さず素直に書くようにと指導される。自分の心の奥底に潜むあらゆる否定的な感情が不幸の原因であり、それら一切を表出させて清めることが救済に繋がると信じられているからである。浄心行は、「偽りの自己」を自覚して自己の實相を内観し、「本来の自己」を取り戻すための契機として理解されている。

【参考文献】

谷口雅春『生長の家とは如何なるものか』日本教文社、1997年。